
白い薔薇の庭

ニニカヤヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い薔薇の庭

【Nコード】

N3825D

【作者名】

ニニカヤヤ

【あらすじ】

自分はこの国の異物だ。王族でありながらその色を持たないデューク。漆黒の髪と夜のような藍色の瞳は、敵国から嫁いだ亡き母から譲り受けたもの。そんなモラトリアム真っ最中のヘタレ根暗王子と嵐にもビクともしない努力型超絶美少女の公爵令嬢リテイエラの甘酸っぱい恋愛コメディ。

プロローグ

今年も、白い薔薇が庭園を埋め尽くす。

むせ返る白い花の匂いに吐き気がして、デュークは庭園に面する窓をピシヤリと閉めた。

閉めた窓ガラスに映る自分の漆黒の髪から、デュークは鬱陶しそうに目を逸らした。

この国の貴族には黒髪などいない。

王族でありながら、その特徴である金髪碧眼を持たない自分は、この国にとって異物だ。ましてやこの夜のような暗い藍色の瞳など。

窓を閉めても漂う白い花の残り香に、デュークはめまいを感じた。

この白い花は、病気を患った白い母の顔を思い出させるのだ。

そしてこの庭で出会った、触れることも許されない大切な少女を……。

1章：公爵令嬢と社交会デビュー

クロスフォード王国の建国祭の前日に届いた盛装に、第2王子であるデュークは困り果てていた。

贈り主は自分の後見人であるカティス・トゥエラ公爵。父親である王とほとんど会ったことがないデュークにとって、父親のような存在である。

贈られてきた盛装は、デュークの漆黒の髪によく合う同色の生地で、金糸で縁取られ、白いスカーフを止めているタイピンは、彼の夜を溶かし込んだような深い藍色の瞳のような色をしていて美しい。軍服のようなデザインは華美すぎず、デュークの好みのものだ。それならば、なにが問題であるのか。

デュークが気にしているのはそのデザインではない。その用途だ。

「今更盛装なんて贈って、あの方はなにを考えておられるのだ？」

訓練所で部下たちの勇士を眺めながら、一人ごちる。

自慢ではないが、デュークは滅多に公の場に顔を出さない。それは建国祭のような大きな行事とも言えども例外ではない。理由は、まあいろいろとあるのだが、それはカティスも了承済みのはずだ。なぜ今になってこんなものを贈ってくるのか。

「決まっているだろう。明日のパーティーに出るためさ。」

事も無げに答えたのは、同僚であり、友人であり、兄貴分であるクラヴァンスことヴァンだ。それと同時に彼はカティスの長男でもある。同僚と言うのは、デュークが王子であるにもかかわらず、王立騎士団に所属しており、ヴァンが暁部隊の部隊長、デュークが白夜部隊の部隊長を勤めているからである。

男の汗くさい訓練所とは明らかに違う空気をまとい、相変わらずの甘いマスクでにっこりと微笑む。一見優美で中性的な顔立ちである

が、引き締まった身体故か、どことなく男らしい。この国の貴族らしい金髪碧眼は彼の美しさを引き立てて、醸し出す無駄な色気は鬱陶しいほどだ。

先程からこちらを見て顔を赤くしているメイドたちをひと睨みで追い払って、デュークはため息をついた。

若い娘なら悲鳴をあげかねない美青年だが、残念ながら男であるデュークにとっては面倒くさいことこの上ない代物である。この男の垂れ流しの色気で、メイドや貴婦人たちの視線が鬱陶しくてたまらないのだ。

デュークは特に気にしたことがないので知らないが、デュークはヴァンに劣らない容姿をしている。少し癖のある漆黒の髪と深い藍色の瞳はこの国では珍しく、落ち着いた表情は陰があってステキ！と評判である。

メイドたちの視線はデュークの容姿のせいでもあるのだが、気がつかないほうが幸せといえよう。彼女たちは、デュークとヴァンがただならぬ仲だと噂しているのだから。

垂れ流しの色気の弊害である。

気を取り直して、デュークはヴァンに反論した。

「俺は行かないぞ。申し訳ないがカティスにもそう伝えてくれ。」
「諭え恩あるカティスの頼みといえども、そればかりは聞きたくない。」

「しかしなあ、いいのか？明日の建国祭は、我が麗しき妹リテイエラの社交会デビューだというのに。」
「そんな事聞いてない。」

ヴァンが投下した爆弾発言に、デュークは耳を疑うしかなかった。リテイエラはカティスの娘でヴァンの妹、デュークにとっては幼なじみの少女である。

「なに、っという言うかまだだったのか！？」
デュークが驚くのも無理はない。

彼女はすでに16才。この国の平均的な社交会デビューは12から

遅くとも14才。普通なら嫁に行ってもおかしくない年齢なのだ。

「まあ、知らなくても無理はないか。騎士団に入ってから6年間、お前はずっとリティを避けているのだからね。」

ヴァンが意地悪く言うのにも理由がある。彼は何を隠そう、度が過ぎる程の妹至上主義者、いわゆるシスコンなのである。ヴァンからしてみれば、どこからどう見ても可憐な妹を避けようとするデュークが信じられないのだろう。どこから見ても完璧な彼の顔が、リエラと言うときにデレデレとだらしなくしまりのない顔になったのは、そのためである。

デュークとしても、リエラのことには憎からず思っている。美しく可憐で、賢く優しい。そんな彼女に、ただの幼なじみとしてではない感情も抱いている。

だが、だからこそ彼女を避けるようにして騎士団に入隊したのだが、ヴァンはそれが気に入らないようだ。

「ついでにもう一つ教えてやろうか。我が妹が社交会に出ないのは、頭の病気だの、人前に出るのがはばかられる顔だのけしからん噂があったんだが……。」

と、ヴァンは甘いマスクを信じられないくらい歪めた。彼は妹が絡むと、見境がない。今も鬼のような形相をして、音を立てて舌打ちしている。

「その噂のおかげで今回の建国祭での社交会デビューは、注目の的だ。」

その鬼のような表情を変えず、ヴァンは憎々しげに呟く。

「つまり、なにが良かったんだ？」

何となく、予想はできている。リエラは美しい。6年たって、きつとさらに美しい少女になっただろう。ただでさえ注目を集めている彼女は、その美貌で人々の視線を独り占めするのだろう。

「いいのか、お前は。リティが……どこかの馬の骨に、たっ誑かされても……!!」

ヤケにどもったのは言いたくなかったのだろう。大切な大切な妹が

誑かされるなんて。

その言葉にはデュークも真っ青になった。

リテイエラが誑かされる…？

冗談ではない。

デュークにとつても、リテイエラは大切な大切な少女だ。汚してしまうのが怖くて、必死にこの6年間耐えてきた。会いたいと手紙が来ても、今忙しいとそっけなく返し、諦めようと必死に必死に避けてきたと言うのに。

結局は、リテイエラが誑かされるといった一言で、社交会のこと、諦めようとしたことも全て忘れ、デュークは建国祭に参加することにしたのである。

1章：公爵令嬢と社交会デビュー（後書き）

次回、根暗王子が長々と回想に入ります。

公爵令嬢と社交界デビュー（2）

デュークが彼女と出会ったのは、7才の頃…
宮廷の中庭に白い薔薇の花が咲く初夏の事である。

あの頃のデュークは、幼く、なにもできない子供だった。ただ、正妃である母が亡くなったことで、自分の立場が大きく変わったことは覚えていいる。

この中庭の薔薇のような真っ白な顔をした母が亡くなって数日後、7才のデュークは可愛くないことに、告別式でも泣くことなく、黙って前をにらみ続けていた。クロスフォード王国の正妃である母は隣国シュヴァルの王女。もともと争いの絶えない両国は、婚姻を結ぶことで同盟を結び、一時的な平和を得ていた。両国の関係は、母の死によって必然的に悪化していき、その息子であるデュークにも影響を及ぼした。

第2妃だったアンリエットが正妃につき、隣国との同盟を良く思っていない重臣たちによってデュークの王位継承権を2位に降ろされた。アンリエットはクロスフォードの伯爵家の出であり、敵国の王妃の子であるデュークよりもふさわしいとして、アンリエットの子である第3王子アルフォンスが王太子となった。心無い使用人の噂話は、幼いデュークの心に深く影を落としていた。

そんな中、自分の後見人となってくれたのが、宮廷内でも右に出るものがないほど格式高く、王家との親交も厚いトゥエラ公爵であった。

もう30代半ばに差し掛かるカティスは、20代前半と言っても差し支えないほど若く、デュークが今まで見たこともないくらい呆れてしまうほど甘いマスクをしていた。

「殿下、私には二人の子供がいるのですよ。」

そういつて紹介されたのが、ヴァンと彼女だ。ヴァンは当時12才であるにもかかわらず、父親から余すことなく受け継いだ甘いマスクと、うんざりするような色気を発していて、正直苦手だった。

そのヴァンの後ろに控えめにたたずんでいたのが、当時4才のリティエラだった。

4才のリティエラは非常に愛らしく、カティスやヴァンのしつこいくらい煌びやかで輝かしい金髪碧眼とは少し異なり、落ち着いた金髪で、瞳は穏やかで暖かみのある碧色をしていた。肌は白磁のように白く染み一つない。360度どこから見ても完璧な美少女。

彼女は天使のようなその顔で、微笑んだ。

（思えばあの時、俺はリティエラが好きになってしまったんだろ
うな）

それからリティエラとヴァンは、2日と空けずにデュークの元に遊びに来た。一緒に勉強もした。ヴァンの剣の稽古と一緒に行くようになったからは、リティエラはお菓子を持って差し入れにきてくれた。

リティエラは、その場に誰がいても必ず一番にデュークの名前を呼んだ。それがどんなにデュークの心を支えたことが。

デュークにとって、リティエラという小さな存在は、かけがえのないものになった。

だから諦めようとしたのだ。敵国の王妃の子である自分は、彼女を汚してしまう。彼女の幸せを奪ってしまう。

デュークがリティエラを避けるように騎士団に入って6年、一度も彼女には会っていない。

誰かに奪われてしまうかもしれないという衝撃でつい建国祭の出席を決めてしまったが、リテイエラに会うことに不安を感じていたのだ。

公爵令嬢と社交界デビュー(2) (後書き)

書き始めはどうしても説明とかで文章重くて申し訳ないです)・
(

ちゃんとコメディするように頑張ります。

公爵令嬢と社交界デビュー（3）

建国祭前夜、トウエラ公爵家では久しぶりの家族3人水入らずの晩餐となった。

リティエラが部屋に入るなり、

「久しぶりだね！！私の可愛いリティエラッ！！！！！！」

と喋って飛びついてきた父カティスを、

「ええ、本当に。」

と天使の笑顔を浮かべながら半歩下がって見事にかわし、

「ただいまリティ。兄さまにただいまのキスをさせておくれ。」

と扉の後ろに隠れて、後ろから抱きつこうとした兄クラヴァンスの腕を、

「おかえりなさいお兄さま。」

と顔に笑顔を貼り付けたまま扇で受け流したりティエラは、余りにも似たもの同士の親子の襲撃を受けることなく、静かに自分の席に着くことに成功した。

その横で柱にぶつけて赤くなった顔をしゃがみ込んで押さえる父46才（自称永遠の20代）と、受け流されて行く先をなくした腕を悲しそうに見つめる兄24才。

公爵家では日常と化しつつある光景である。

父と兄の愛は分かる。しかし、彼らは目に入れても痛くないどころか、殴られても幸せを感じるであろう自分の愛娘（妹）を、放っておけばしがみついて顔中にキスしてしまいいには舐め回していただろう。食事前にそんなことをされたくないリティエラは、すっかり二人の襲撃をかわすのに慣れてしまっていた。

どうせこの親子は、避けられても幸せなのだ。

常に父と兄の異常なまでの愛情にさらされ続けた愛娘（妹）は、人生16年目にして、知らなくていいものまで悟ってしまっていた。

「ところで、私の天使のようなリテイ。君のお願い通り、デューク様に君の用意した盛装を贈りつけておいたよ。」

赤くなつた鼻をさすりながら、大人しく席に着いたカティスに鬱陶しい位の笑顔を向けられたリテイは、内心呆れながらも笑顔で礼を述べる。名前の前に可愛いとか天使のようなとかいちいちつけるところが鬱陶しい。

「ありがとう、お父さま。」

40代後半に差し掛かるのに、どんな魔術を使ったのかツヤツヤな肌を維持している父は、どう見ても20代後半にしか見えない。この肌を見ていると、三枚に卸して天日干しにしたくなる。自分はキウリのパックから山羊のミルク、得体の知れない薬草やその他もろもろまで試し、美容においては努力を怠らないようにしているというのに。

淑女とは、優雅な水鳥のように水面下の努力を怠ってはならない。

彼女の美しさは、間違いなくその努力によるものである。苦労してののだ、この色気垂れ流しの父と兄のおかげで。

目に毒なくらい煌びやかな父と兄に比べると、リテイエラはどうしても地味な顔立ちだ。その生まれ持ったハンディを埋めるため、急に自分を避けるようになった幼なじみのデュークを振り向かせるため、血の滲むような努力を続けてきた。

ダンスに礼儀作法、お菓子、美味しい紅茶の入れ方、護身術や魔法に至るまで、必要だと思ったことは全てやった。きつと今の自分は完璧な淑女になっていると自信を持って言える。

幼いころは無邪気だった彼女も、デュークが避けていた6年間で、すっかりやさぐれてしまっていた。もちろん、リテイエラは努力する淑女であるので、殿方の夢は壊さない。ただ、ちよつとだけ腹の内が黒くなっているのだった。

「そうだ。その建国祭のパーティーなんだが、デュークは出席する

「そうだよ。」

兄が負けじと話に割り込む。これには、さすがのリティエラも破顔した。デュークに逢えるのだ。

初めての舞踏会で、知らない人と踊るのは怖いと、デュークや兄と踊りたいと泣き真似をした甲斐があった。

愛しい妹と踊りたい一心で、あのデュークをパーティーに引きずり出すことに成功したらしい。

「本当！？兄さま、デューク様を誘ってくださったのね！！嬉しい。」

ヴァンは妹の満面の笑みに、今にもとろけそうになっている。

計画は順調だ。

何としてもデュークをオトス。

幸せは待っていても来ないのだ。

欲しいものはどんな手を使っても、手に入れてみせる。

そんな黒い心を胸に秘め、リティエラは天使のような微笑みを浮かべたのだった。

公爵令嬢と社交界デビュー（4）

昨年以上の賑わいをみせた建国祭は、深夜まで続く王宮でのパーティーに移行した。城下では、町人たちがお祭り騒ぎをしている頃。貴族にとつては、こちらのパーティーがメインだ。着飾った貴婦人や紳士が噂や情報を交換し、水面下で勢力を広げてゆく、華々しくも厳しい政治の舞台であるともいえる。

そんななかで、今一番人々の噂にのぼるのがトウエラ公爵令嬢の遅い社交界デビューだった。

「てつきりご病気だと思っておりますけど、回復されたのかしら。」

「いやいや、私はトウエラ公爵があまりの娘可愛さに出し惜しみしているという噂も聞きますぞ。」

「あまりの頭の可愛らしさに、礼儀作法を覚えるのに時間がかかったという話は単なる噂でしたかな。」

まだ現れないトウエラ公爵令嬢に、人々は無責任な噂を吟味しあう。まったく、いい加減なものだ。漆黒の盛装に身を包んだデュークは、入り口がよく見える壁にもたれかかり、溜め息を吐いた。誰もリエラを見たことがなくせに、興味本位で面白おかしく騒ぎ立てる貴族たちの多いこと。

そこへ、会場の入り口付近でざわめきが広がった。

「トウエラ公爵家の御一行が参られたようだ。」

誰かが興奮気味に呟くのが聞こえた。

父のトウエラ公爵にエスコートされたりリエラの姿に、誰もが息を忘れた。白いシフォンのドレスに彼女の落ち着いた金髪はとても合っている。大多数の貴婦人たちのように複雑怪奇な髪型ではなく、シンプルに結い上げられた髪。細く、白磁のようなじ。暖かみのある穏やかな瞳にふせがちな長い睫が影を落とし、なんとも奥ゆかしい。

6年ぶりに見る彼女は、完璧な淑女、しかも超絶美少女になっていた。どこから見ても鬱陶しい位の父カティスの美貌の隣でも引けをとらない。

誰もがその美しさに二の足を踏む中、壁にたたずむデュークに気がついたリティエラは、花も綻ぶどころか恥ずかしがって隠れてしまふような満面の笑みを浮かべた。

おおおおおっ…！！

その笑顔に、一斉に会場が湧く。

とたんに、どこかの勇氣ある貴族のドラ息子たちが空気も読まずに二人の間に割って入り、彼女はダンスを誘う狼共で見えなくなってしまうた。

「思った通りだ。あの野獣どもめ！！私のリティに群がりやがって…！！！」

いつの間に現れたのか、隣ではヴァンが怨念のような凄まじいオーラを放っているが、デュークにはそれどころではなかった。彼女は変わっていない。姿は信じられないくらい美しくなったけど。いつも一番に自分に微笑みかけてくれる、小さなリティのままだったことに、嬉しさがこみ上げてくる。

いつまでもポーっとして動こうとしないデュークに、呆れたようなヴァンの言葉が投げかけられる。

「何やってるんだ、早くいけよ。一番は譲ってやる」

滝に飛び込む覚悟で言っただけの言葉だというのに、デュークは返事もそこそこに駆けだしていつてしまった。

「まったく、世話の焼ける…」

自分だつて一番にリティエラと踊りたかった。それでも、大人のシスコンは涙をのんで親友に譲ってやったのだった。

空気の読めないドラ息子達に囲まれたリティエラは、正直感傷に浸

っているどころではなかった。

「是非私と踊りませんか？」

「いいや、私と……」

と勝手に盛り上がる男たちに囲まれ、応対に追われていた。

鬱陶しい父と兄のおかげで受け流すのはなれているが、数が半端ではない。

(この……ボウフラ共っ！！邪魔だわ、デューク様の所に行けないじゃないっ)

予想外の展開に苛立ち、舌打ちしてしまいたくなる。あまりダンスを断るのは失礼なことなのだが、初ダンスはデュークと踊るつもりだ。それは譲れない。

ふと後ろから手を引かれて驚いたりティエラは、笑顔を張り付けたまま、その失礼な輩の足を踏んでやろうかと足をあげた。

「俺と踊ってくれないか？」

リティエラが知らない低い声。しかし、その響き、話し方はリティエラが知っているものだ。

「デューク様……」

6年ぶりに会った彼は、背も高くなってすっかり見違えてしまったようだ。幼さはすでになく、そこにいるのは立派な男の人だった。

公爵令嬢と社交界デビュー（5）

夢かもしれない。

自分の腕の中で、少女がはにかむように笑っている。

昔と変わらぬ笑顔で、昔と見違える美しさで。

言葉をかけたら消えてしまうような気がして、デュークはただほめて夢の中にいるような少女を見つめることしか出来ない。

少女も何か躊躇っているようで、デュークに声をかけあぐねているようだった。

周りの視線も、カティスやヴァンの呪い殺されそうな視線も気にならなかった。世界には、自分と彼女しか存在していないかのような錯覚に陥る。

そんなデュークとは関係なしにワルツは終盤へと差し掛かり、何か話さなくては、と焦りばかりが募る。

「ずっと、お会いしたかった・・・」
夢のような少女に愛しむように言われ、どう返していいかわからない。

自分がこんな愚図だとは思もしなかった。愛しい少女にける言葉も見つからないとは。

「でも私、本当は怒っていたのですよ。6年間ちつともお会いしてくださらないのだもの。」

リティエラははにかむような笑顔から、すこし拗ねたような顔をする。

そんな顔も愛らしいと感じる自分は、カティスやヴァンのことを馬鹿にできないのだろう。

「すまない。騎士となってからは、なかなか時間がなくて・・・」
なんとというへたれた言い訳だろう。許されるならば自分をなます切りにしてやりたい。

こんな気の利いた返事ひとつ返せない不甲斐ない自分に、リテイエラはただ嬉しそうに笑った。

「いいえ。私、デューク様のお顔を見たら、すっかり怒る気をなくしてしまいました。ただ・・・とても、嬉しくて。」

添えた手にわずかな力が加わるのが、たまらなく愛らしい。

6年間必死に耐え続けた思いが、堰を切ってあふれ出しそうだ。

この気持ちを、なんと表現すればいいかわからない。

かわいい、すきだ、愛おしい。

そんな陳腐な言葉では表せない。

そばにいと心地よい、安堵する。しかし、居たたまれない。これでは自分が年頃の少女のようだ。

結局、それ以上の言葉を交わずにワルツは終わってしまった。

「リテイ！次は私の番だよ！！もう1曲たりとも譲ってやることはできないぞ、デューク！！」

そういつて鬼の形相でヴァンは彼女を連れ去っていく。

もう一曲、といおうとして差し出した手を引っ込めることも忘れ呆然とするデュークに、リテイエラは「また」と唇の動きだけで伝え、新たな踊りの輪に加わっていったのだった。

公爵令嬢と社交界デビュー（6）

息をしていたかさえ思い出せない。

兄とのダンスも5曲目に入り、だんだん冷静になってきた頭で考える。

自分はデューク様の前で粗相をしなかっただろうか。

足を踏んだりしていない？ぽーっとしすぎて間抜けな顔をしていなかったかしら。

考えてもきりはない。

6年だ。

彼を思い続けてただひたすらに努力した。

準備も万端のはずだった。

花も恥らうような笑顔で、頬を染めて、適度にボディータッチをしつつ、完璧な淑女として振る舞い……。話す内容も考えていた。

次に会う約束も取り付けるつもりだった。

なのに！

デュークを目の前にしたとたん、頭の中が真っ白になってしまった。なんといいもつたいたいことをしたのだろう。

やるべきことはたくさんあったのに、何一つできなかった。

ただ、見惚れて……

（年頃の娘じゃあるまいし！！こっちはありとあらゆる手練手管でデューク様をおとす作戦があったというのに）

馬鹿なことをしてしまった気がする。

あるう事がデューク様相手に拗ねてしまった。

父や兄ならそれすらも可愛いと歓喜するだろう。しかし、

（年端も行かない子供でもないのだから！！拗ねるなんて子供みた

いに・・・)

恥ずかしくて顔から火が出そうだ。

もちろん、そんなときでも表面上では完璧な淑女として振舞っている。どんな難解なステップでも羽のように踊れる。それだけの努力をしてきたのだ。

なのに！

(あああああつ)

叫びだしたい気持ちを、兄の鬱陶しい美貌と色気を見て押さえ込む。

「どうしたんだい？リテイ。そんなに見つめられたら恥ずかしいな。」

兄は相変わらずだ。全力で、妹を愛でている。

照れる表情すら扇情的で、妹としてはあるまじきことなのだが、殴り飛ばしてやりたい気持ちに駆られる。兄や父が嫌いなわけではない。家族として、愛している。

ただこれは、なんとというか、反抗期のようなものだ。

この親子の美貌と色気が鬱陶しくてたまらないという、可愛い反抗心。

自分が幸せな環境で育っていることも知っている。この上ないくらいに感謝している。

「なんでもありませんわ、お兄様。」

でも、鬱陶しいものは鬱陶しいのだ。

やるせない気持ちをこっそり兄の足を踏むことですっきりさせようとしたのだが、ちょっと嬉しそうな顔を見て更にげんなりした気持ちになったのだった。

公爵令嬢と社交界デビュー（7）

貴族たちへの挨拶回りは、退屈だった。

みな同じ事しか言わない。

トウエラ公爵家の当主カティスや次期当主クラヴァンスの美しさを例えるなら、それは美しい赤い薔薇だ。王宮のような華やかな場所で、絢爛と咲き誇る赤い薔薇。

それになぞらえて、人々はリテイシアを白い薔薇と褒め称えた。

それを、リテイシアは冷めた気持ちで聞いていた。

リテイシア自身、それなりに美しい事は自覚しているし、そうなるための努力も惜しまなかった。自信はある。が、父や兄と並べられるのはコンプレックスに感じてしまう。

母は、それはもう美しい人だったようだ。残念ながら姿似はないし、物心つく前になくなったので顔を覚えていない。

画家に書かせたものは、父がほとんど捨ててしまったらしい。誰一人として、母の美しさを描けた画家はいなかったそうだ。

あらかた挨拶を終えたところで、盛大なファンファーレが流れた。それにあわせて王と王妃が入場してくる。後ろには王太子であるアルフォンスが妹姫のリリアナを伴っている。この国の貴族特有の金髪に、冴え渡る青い目をしている王太子は、父や兄ほどではないが美しい顔立ちをしている。妹姫は9歳とまだ幼いが、アルフォンス同様に金髪に青い目をしており、美しく育つであろう事が見受けられる。

（いい御身分なこと）

我が物顔で歩く王妃アンリエットには、正直いい感情を持っていない。

リテイシアにとっては、デュークをないがしろにしているひどい義

母だ。

幼いデュークを王太子から引き摺り下ろし、それでも飽き足らず周囲に、アルフォンスが王太子だと見せ付けているのだ。

デュークは騎士になって第二王位継承権を捨てたのにも関わらずだ。更に、気に入らないことに父は彼女のお気に入りなのだ。

「まあ、カティス。お前が話していた娘というのはその者ですか」
そういつて父に手を差し出す。

そうすると父は、王妃の手の甲にキスを落とすのだ。
それが見たくなくて、リテイシアは深くお辞儀する。

「私の可愛いリテイシアです。王妃様、どうぞよしなに。」

12時の鐘がなる前に、リテイシアは王宮を離れた。王妃たちが現れてすぐに、デュークはいなくなってしまうたし、これ以上いる意味もない。

結局、収穫という収穫はデュークと踊れたことだけで、次に会う約束もなにもできずに帰ることになったことが悔やまれる。しかし、一度の失敗で終わるはずもない。手はすでに打ってある。

帰りの馬車で、ふと王太子アルフォンスの意味ありげな目線を思い出す。

値踏みするような、冷たい嫌な目線だった。

愛すべき日常

建国際から数日、デュークにとって平穏な毎日が戻ってきた。

相変わらず部下たちは汗臭いし、男むさい。見ていて何の楽しみも感じないが、この風景が自分にとっての平穏だと感じる。友人のヴァンは相変わらずだが、社交場の人々の目線や、おしろいを塗りたくり香水のおいをばらまく女たち、心のない表情に比べればこんな華やかでもなんでもないただくさいだけの日常が愛おしい。

リテイエラに感じた狂おしいほどの思いも、王妃アンリエットの姿を見て我に返った。

まるで冷や水を被せられたようだった。

この国の異物が、なにを熱病に浮かされていたのだろう。

リテイエラは公爵家という大貴族の家系に生まれた、この国の貴族だ。自分のような異端な存在とは違う。

それをアンリエットに言われた気分だった。

「おいおい、すっかり腑抜けたな。建国際から様子がおかしいぞ？」
老人のような遠い目をしてかすかに微笑んでいたデュークを訝しげに眺めてヴァンはたずねた。なにを愛おしげに漢たちを見ているのか、疑問でならない。

「日常がこんなにも素晴らしいなんて、今まで思わなかったよ。この臭いだけの訓練場も、俺にとってはかけがえのない場所なんだな
って……」

表情を変えずにのたまうデューク。

「なにを言ってるんだ、何を。リテイシアが愛らしすぎて頭がおか

しくなったのか？」

もちろん、ヴァンは冗談のつもりでそう言ったが、「そうかもなあー」という気のない返事が返ってくるばかりである。これはいよいよおかしい。

「リテイエラがな、久しぶりにお前と会えて嬉しかったと言っていたよ。できればまた会ってやってくれ。あの子はお前に懐いている。」
「デュークがおかしくなった原因であろう少女の名前を出して反応を見してみるが、

「リテイエラ嬢はもう適齢期の娘だろう。俺が会えば良くない噂になる。適当に断っておいてくれよ。」
とあまり取り合おうとしない。

「建国際以来、婚約を申し込むやつが多くてな……。」
と引いて気を引こうとしても、

「すっかり美しくなっていたからな。よい相手を選べるだろう。」
すっかり隠居した老人が、孫の話をしているようだ。

「お前は、私のリテイがどの馬の骨とくっついてても構わんというのか。」

妹についた虫はすべて叩き潰して回る。そう断言できるヴァンは、妹がデュークを慕っていることを知っている。悔しいが、デュークなら、妹を共有することを許してもいいとさえ思っていたのに、この反応は裏切りとしか考えられなかった。

「俺はさ、リテイエラを大事に思ってるよ。だから、俺が近くにいてリテイエラの人生を狂わせてしまうことが嫌だ。俺は敵国の女の子だから」

すっかり自分の殻に閉じこもっているデュークには、リテイエラの思いなどは関係ないらしい。

「俺は、お前ならいいと思っていたんだがな。そんな腑抜けたことでは、リテイを幸せにはできんだろうな。」

（やれやれ、面倒な男を好きになったものだ。我が妹、これは一筋

縄ではいかないぞ)

今は何を言っても無意味だと結論し、ヴァンは「仕事がある」といつて副官に指示を出して訓練場を去った。

残されたヴァンとデュークの部下たちは、なんだか生暖かいデュークの視線を不審に思いながらも、訓練を続けたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3825d/>

白い薔薇の庭

2011年7月30日03時14分発行